

ピアノレッスン時の受講生の演奏傾向例と指導例

—より効果的なレッスンを目指して—

小野隆司*

1. はじめに

教育課程に於いてのピアノ奏法履修の場では、時間的な制限からより効率の良いレッスンを求められる。そのため、指導者側にもよりの確かな状態分析とそれに基づく有益な助言を与えられるかが大変重要になってくる。また受講生、特に初めてピアノに対峙する初心者にとっては、毎日の練習の方法などの基礎事項を理解しているかどうか後のレッスンに大変大きな影響を与えることになる。ここでは常日頃のレッスン時によく見られる受講生の演奏傾向を分析し、それに基づく指導例を例示することにより、より効果的なレッスンを実施できるよう考察してみたい。

2. ピアノレッスンで学んでほしいこととは？

まず初めに、ピアノレッスンの場で学んでほしいこととはどのようなことだろうか。

ピアノ奏法に限らず、音楽の演奏技法の習得は「実技」科目として分類される。「実技」とはその文字が示すように「実際に行動して技を習得する」とことと解釈できる。音楽演奏に求められる「実技」とは、根拠となる情報源、レッスンの場に於いては「楽譜」という伝達媒体の情報を正確に読み解き、音やリズム等の具体的な形としてイメージし、如何に正確に器楽であれば楽器、また声楽であれば自らの身体を操作して的確な音をタイミング良く出せるか、如何に精度の高い実際の身体の動きを再現性の高い記憶として理解しているかということになる。指導者は自ら体得した経験とスキルを基にレッスン時にこれらの点をチェックしているわけだが、その際受講生の目標達成を阻害している様々な要素が見えてくることもある。それに対して指導者が的確なアドバイスを与えられることが、受講生にとってどれだけ励みになることであろうか。次章以降では、具体的な事例を挙げて考察を進めてみよう。

3. リズム感についての傾向と指導例

音楽を演奏する上で、リズム感というものは音楽全体を司る大変重要な要素と言える。ただ残念なことに、一部の受講生に於いてリズムを的確に感じないでピアノに臨んでいる例が見受けられる。そのような受講生の演奏はテンポが安定して流れず、また速いテンポにも対応できず非常に重苦しい演奏になっていることが多い。ここではなぜそのような状態になってしまうのか、それに対しての効果的な指導法とはどのようなものかを、具体的な例を挙げながら考えてみたい。

3-1. 拍を数えないで弾きだすケース

まず考えられるのは、演奏に際して曲のテンポに基づくリズムを体の中に起こさずに弾きだすケース、すなわちカウントをしないでいきなり音を出そうとする状態である。このようなケースの場合、弾きだす

* 東海学園大学教育学部非常勤講師

際に体から「そーれ」とか「さん、はい」のような拍感が表れてこない。どうも「弾きだせばリズムは作られる」という考えを持ってしまっているらしく、指導者がびっくりさせられるくらい突然演奏が始まったりする。このような受講者に対しては演奏前に必ずカウントすることをまず指導するのはもちろんだが、それと同時になぜそうしなければならないのか、なぜその必要があるのかを理解させることが必要となってくる。実はピアノ演奏の際、私たちの体は一定のリズム、すなわち拍を基準として左右の指を動かしている。体の中で飛び上がるほどの勢いの拍を感じているからこそキビキビと指を動かすことができるのだ。指は別々に動いているように見えるが、共通のリズムの基準があるからこそあのように動けるのである。まずこのことを理解させる必要がある。「ダンスと同じで、先に体内で曲のリズムが動いていなければ体は動かない」ということをしっかり理解させてカウントを実践させることにより、正しい弾きだしを確実に習慣化することが可能になると考える。その際、「バンドのドラマーは曲の冒頭で何をするか？」などの例を提示するとより効果的である。

3-2. 拍の数え間違いが多いケース

前述の「拍を数えないで弾きだすケース」とよく似ているが、数えて弾きだしても途中で拍のカウントがずれてしまい、結果としていびつな音楽になってしまっている例である。その中でも特に、2拍以上の長い音を伸ばしているときにこの状態が顕著に表れることが多い。しかも大多数のケースに於いて、余分に拍を伸ばしてしまう傾向が強い。レッスンでの様子を見てみると、長く伸ばす音に入るときに「ここは動かなくてもいいから楽だぞ、はあ、ヤレヤレ…」という心理状態に陥って、拍のカウントが疎かになっているのではないかと推測される。このような場合、「音楽は動きだしたら休憩はなく止まれない」、「常に動き続ける緊張感を持って弾く」という事実を理解させるように指導することが必要と考える。具体的には伸ばす音のカウントを音や声で示すという方法が一般的だが、「音楽は拍子という一定のグルーピングに基づいて常に動き続けている」ということを理解させるために、電子楽器のリズムマシン機能を使用するなどの工夫を行うとより効果的と考える。通常のアコースティックピアノを使用している場合は、指導者がリズムパートを即興で作って連弾を試みるのも良いかもしれない。

3-3. 拍を緩い数え方で数えてしまっているケース

このケースの場合、なかなかテンポが上げられず指のアクションも緩慢で、全体に締まりのないローテンションの音楽になってしまっている傾向を示すことが多い。このような受講生に試しに4拍子を口に出して数えてもらった場合、「イチ、ニー、サン、シー」、場合によっては「イーチ、ニー、サーン、シー」と緩い調子で数えてくる。実は音楽の拍は「イチッ、ニッ、サンッ、シッ」とハイテンションで、ラジオ体操の号令のように伸ばさずキビキビと数えた方が実際の形に近い。要するに数え方、リズムの感じ方がまるで違っているのである。レッスンでは音楽は基本ハイテンションであること、数え方の違いで音楽が激変することを指導し、行動と共に理解させるのだが、私はこの要素については「いかに体感から理解してもらうか」が大変重要だと考えている。その一例として受講生が座っているピアノ用の背もたれ付き椅子の背の上の部分で、「トンッ、トンッ、トンッ、トンッ」と軽く叩いて実際のリズムの弾みを体感できる形で伝えることを試してみた。実行してみると、受講生本人も驚くくらいの演奏の変化が見られることがある。このような方法でリズムの実際を体感して覚えてもらうのが理想である。個人的には、電気治療器のようなパルスを手で体感できる物とメトロノームを組み合わせられると、理想的なリズム体感マシンができるのではないかと考えている。

4. タッチについての傾向と指導例

ピアノを弾くにあたって、タッチは音のキャラクターを決定していく大変重要な要素である。ただ初心者、特にピアノを始めて履修する受講者にとっては結構勘違いをしていることが多く見られる部分でもあ

る。我々指導者にとっても、より適切な指導を求められていく要素とも言える。ここではそのような例を挙げてみたい。

4-1. 鍵盤へのコンタクトが緩くなってしまうケース

このケースの場合、全体にふんわりした弱い音になってしまい、なかなか歯切れの良い音が出せないことが多い。「ピアノは丁寧に弾く」ということを過剰に意識しすぎているのか、指の動き自体もゆっくりでなかなかテンポを上げることができない例が多い。また、指先が立っておらず平たい指のままで鍵盤にコンタクトしている傾向が強い。このような受講生は、「鍵盤は指で押さえるものである」という誤解をしていることが多い。実は鍵盤楽器奏法に於いては、指は「掴む」という動きをしている。一瞬軽く掴んでその直後に脱力をしているのだ。この誤解を解くための指導として、片手で拳を作りもう片方の手をそれに被せて、軽く掴んだ直後に脱力をするという動きを実際に体感させてみるというやり方を試みた。これを行ってからピアノを実際に弾いてもらったところ、より歯切れの良い音を出せるようになった受講生が多く見られた。また、「指先を立てるのは掴む動きをするために必要なこと」ということを理解させるきっかけにも繋がった。

4-2. 前の音と次の音が重なって鳴ってしまうケース

このケースは、次の音を弾いたときに前の音が残ってしまい全体に不明瞭な音になってしまう例である。このような受講生は鍵盤を沈める動きにはある程度気を遣っているが、鍵盤を上げること、つまり「音の切り」に配慮が及んでいないことが多い。同様の例として、休符で無音になるべきタイミングで音が残ってしまっている例がある。このような事例が見られる原因の一つとして、ピアノの発音原理が大きく影響しているのではないかと考えられる。数ある鍵盤楽器の中でピアノは「打弦」、すなわち弦をハンマーが叩くことによって音を出している。この打弦楽器の特徴として「打弦直後の音が一番強く、その後音量が減衰する」という重要な要素が挙げられる。つまりだんだん音が消えていってしまうのだ。そのために音の切りが本人に聞こえにくく、責任持った音の持続という意識が疎かになってしまっているように見受けられる。このような受講生に対して、電子ピアノを用いて疑似的にオルガンの音、つまり減衰せずに持続する音を出す楽器の操作を体験させてみた。オルガンの音は前述のように基本的に減衰しないため、弾いた指を上げずに残していると次の音との重なりが顕著に表れる。そのため「弾いた指は次の音を弾くと同時に上げなければならない」という鍵盤楽器奏法の基本をより良く意識させることに繋げることができた。また、合唱や吹奏楽の経験者に対しては、声や管楽器の音の持続の例を挙げることにより、ピアノの音の特性をより一層理解させることに繋げることができた。

4-3. 鍵盤に指を予め置かず上から打鍵するケース

このケースは初心者だけでなく、意外なことに経験者にも多く見られる事例である。鍵盤の上に指が浮いた状態から打鍵するために、コントロールな音が出せていないことが多い。初心者では叩きつけるような荒っぽい音になってしまうことが多いのだが、経験者の場合は特にスローテンポの静かな曲によく見られる繊細な表現を求められる時に、これが原因で思い通りの音色を作れずに苦労していることがある。このような事例では、何よりも「弾く直前に必ず指を鍵盤にくっつけてから弾く」という習慣を意識づける必要がある。指を鍵盤にくっつけてからアクションすることによって、初めて鍵盤が沈むときの重さを感じながら指を動かすことができる。そしてその動きでハンマーを飛ばすスピードを決めて音量や音色を作っているのである。少しでも指が浮いているとこの鍵盤の重さを感じられず、結果的に思い通りの音が出ないということになってしまう。また、この習慣は次に弾く指を確実に準備するためにも、言い換えればミストーンを防ぐためにも大変有効であるため、常日頃からしっかり指導すべき重要な要素の一つであると考えられる。

5. 楽譜から目が離せない受講生への指導例

ピアノ初心者にとって、楽譜を正確に読み音にしていくのは正直大変な作業である。そんな中でどうしても陥りやすい状況として、「楽譜から目を離せない」が挙げられる。気持ちとしての「間違えて弾きたくない」という想い、それは指導者側からも大変良く理解できる。その想いが強ければ強いほど不安が大きくなっていくのか、楽譜を恋人か救世主の如く見つめ続けてピアノの鍵盤に向かっている受講生がよく見受けられる。そのような状況に陥った受講生は、特徴として自分が出している音をほとんど聴かなくなってしまうことが多い。どうも「楽譜から目を離さずに弾いていれば自分は正しく弾いている」という、一種の催眠術や暗示のようなものにかかってしまっているのではないかと感じられる。レッスンの場に於いても、本来弾くべき手のポジションと全然違う所から平気で弾き始めたり、音やリズムが途中でずれたりしても何食わぬ顔で、いや、むしろ必死の形相でと言うべきだろうか、それに気付かず弾き続けたりするのだ。そしてそれを指導者に指摘されて初めて、自分が間違えて弾いていることに気付いたりする。しかもそれを指摘された際にも、「嘘でしょ？信じられない」とばかりに呆気にとられている例も多く見受けられる。

このような受講生に対する効果的な指導とは如何なるものであろうか。まず求められることは、受講生に「楽譜には出してほしいリズムや音などの情報は書いてあるが、具体的な楽器の操作方法は書いてない」ということに気付かせ、実際に出している音と楽譜の情報にずれを生じさせてはいけないということを理解させることである。ではずれが生じていない、いわゆる「正しく演奏している状態」とは如何なるものか？「正しく演奏する」ということは、「楽譜が指示していることを理解し、楽器の操作という体の動きに正確に変換して実行すること」と言い換えることができる。ピアノ演奏に於いては具体的に、「鍵盤操作が正確に成されているか」ということになる。これを実現するためには、必然的に「自分の手が鍵盤上で正しく動いているか」を視覚的に確認する必要があるということである。最初にこのことを理解してもらえると、次はさらにこれを実行するための方法論に移行することができる。

次に指導するのは、「どうすれば楽譜から目を離せるようになるか」ということである。前述したように、「正しく演奏する」というのは、「正しく楽器を操作する」ということである。そのためには、楽譜の情報を正確に実際の体の動きに変換して少しずつ記憶していく作業が求められていくということになる。要約すると、「楽譜の情報を体の動きとして覚えられれば、楽譜から目を離して手元を確認することができ、ミスを防ぐことができる」ということだ。それが日ごろの練習に求められている作業である。私はそのために、常日頃から練習した所を覚えているかどうか試す、つまり少しずつでも楽譜を見ないで弾いてみるという習慣をつけることが上達に大変重要な要素と考え、指導している。

6. 効果的な練習方法とは？

レッスンの際、毎日の練習にも関わらずなかなか思うような結果が出せず困っている受講者に会うことがよくある。そのような受講者に共通して言えることとして、効果的な練習の方法がわからず戸惑っているという事例がある。実際にどのような練習をしているのか聞いてみると、これは効率が良くないなど思える共通の要素が見えてくる。具体的に例を示してみよう。

- ・間違えたら止まってしまうことが当たり前になっている。なかなかノーミスで通して弾けない。
- ・速く仕上げたいので、速めのテンポで練習している。そのためよく止まってしまう。
- ・弾けるところは速いテンポで、苦手なところは遅いテンポで弾き、同じテンポで弾けない。
- ・練習の初期段階から一度に大量の小節を練習している。
- ・暗譜の課題が出ている場合は、後からまとめて覚える。

- ・初めから両手で練習する。
では、練習によって目指す「良い演奏」とはどのようなものが理想か考えてみよう。
- ・弾きだしたら最後まで止まらない。
- ・楽譜の指示通り、ノーミスで弾けている。奏者の意図に従って指が次の音を的確に準備している。
- ・安定した一定のテンポで曲が進んでいる。
- ・暗譜演奏の場合、途中で忘れてたりしない。音と連動した体の動きとして記憶している。

見比べてみると、初めに示した「悪い練習法」はほとんど、「理想の真逆」を練習していたことが理解できる。そのためレッスンの際に、指導者が適切な練習方法をしっかり指導し、正しい行動に導くことがいかに重要かが理解できるだろう。

私は日頃の練習の方法の例として以下のような手順を提案している。

- ・まず、楽曲を2小節ずつのように、自分の短期記憶で覚えられる量に区切る。
- ・次に区切った範囲を片手ずつ、楽譜の音が具体的にどの鍵盤を操作すると出てくるのか、そしてどのように動きが繋がっていくのか、視覚からくるイメージをしっかり作る。できればこの時、ゆっくりでもリズムに乗って動きをイメージできるとさらに良い。この時にはまだ鍵盤に手を置かず、音は出さない。また、階名唱をするのも効果的である。
- ・イメージが具体的にになったら初めて実際に片手ずつ、一定のテンポに基づいた正確なリズムで音を出してみる。必ず拍をカウントしてから弾き出すこと。また、拍をキビキビと数えること。テンポによっては「1ト、2ト」と拍を分割して数えてみることも有効である。書いてある指使いは基本的に守ること。自分で指使いを考える際はアクロバティックな効率の悪いものにしないのはもちろんだが、弾く度に違う指使いにならないよう気をつける。テンポは間違えずに弾ける遅いテンポから始める。間違えて止まってしまう時はテンポが速すぎるので注意する。自分の頭と体が戸惑わないテンポから始めるのが大事である。出ている音にもよく注意を払うこと。
- ・楽譜を開いた状態である程度片手で間違えずに弾けるようになったら、勇気を出して楽譜を閉じて暗譜で弾けるか、体の動きとして覚えているかどうか試す。3回ノーミスで弾けるようになっていれば体に動きがほぼ入っている。
- ・同様に左手、両手と練習する。特に両手で練習する際、左右の手が共通の拍に基づいて動いていることをよく意識する。
- ・この状態を経てから、練習した部分のテンポを上げてみたり、次の部分の練習に移行する。次の部分ができるようになったら、前の部分と繋げて弾いてみる。その際は、両方の部分を通して弾けるテンポを設定すること。
- ・次の日の練習を開始する時は、前日に練習した内容を覚えているか、必ず復習する。
- ・最終目標は、「ノーミスで最後まで止まらずに演奏できるか」だということをよく理解する。理想は「通して弾ける＝暗譜している」である。

7. おわりに

今回このような形での考察を行って、まだまだ私自身も気付いてないことが多々あるのではないかと、音楽指導は大変奥が深いものであると正直改めて考えさせられた。これまで様々な受講生と対峙する中で、自分が体感として覚えていることをどう言えば理解してくれるのだろうかと思ったり、私自身気付いていなかったことを数多く気付かされたりして、毎回のレッスンが幸運なことに、私にとっても大変有意義な時間になっている。ピアノレッスンの根幹である「体感で覚えているものを言葉を介して伝え、実際の行動と共に理解させる」という点に於いては、スポーツの指導法などと大変多くの共通点が感じられる。今

後そのような分野も参考にしつつ、より深く考察できればと考えている。私自身、これからも初心を忘れることなく、より充実したレッスンを実施できるよう精進していきたい。最後に、未熟な私に様々な助言を与えてくださる多くの先生方、そしてレッスンで出会った、またこれから出会ってゆくであろう受講生諸君に心から感謝の意を表しつつ、結びとさせていただきたいと思う。

参考文献

ピーター・コラッジオ 1997『マエストロ・プロフォンドのすてきにピアノ 第2巻 豊かなタッチ』東京：
株式会社ショパン

ピーター・コラッジオ 1997『マエストロ・プロフォンドのすてきにピアノ 第3巻 完璧な練習法』東京：
株式会社ショパン